

—諸人のここに学びて— 校長室から見える風景(2)

本のある幸せ

朝、出勤して車から降りると、目の前に特別教室棟が見えます。そこに学校図書館があります。朝早く登校する生徒のために、ちょっと早く開館しています(もちろん休館日もあります)。学校図書館は、本を借りたり読んだりする場所であると同時に、生徒にとっては自主学習の場所ともなっています。本を読むにしても勉強するにしても、大切な居場所です。

最近、話題の人物に「蔦屋重三郎」がいます。江戸時代の化政文化の繁栄を担った版元です。その通称「蔦重」の書店名が「耕書堂」です。「書」をもって世を「耕す」、本によって、人々の教養の向上や娯楽を広めることに貢献するということでしょうか。この書店名を聞いて本は時代を超えて身近な存在であるのだと思ったものです。しかし今の時代、本を読む時間は貴重な時間かもしれません。生徒も日々、学習や部活動に忙しく本を手にとることも少なくなっているように思います。生徒だけでなく、大人もそうです。さまざまなメディアから情報があふれている時代です。それでも、本が身近にあることは幸せなこと、本が読めることはありがたいことです。また本から広がる世界があることに変わりはありません。

英語に cultivate という動詞があります。(土地)を耕す、という意味のほかに(作物など)を栽培する、(才能や教養など)を伸ばす、磨くという意味もあります。農業や教養に関する意味があるのは、耕して働きかけてこそ作物が収穫できたり才能、教養が高められるということでしょうか。「耕書堂」と同じ意味あいがあるように思えて、文化の違いはあれど、共通するところがあることに興味を覚えます。また、cultivate と語源が共通する単語に culture(文化)があります。農業が栄えて生活が安定したところに文化が始まる。やはり、人々が積み上げてきたあるいは作り上げたイメージが重なります。culture には、「教養」や「耕作」という意味もあります。

学校図書館に戻ります。勉強するのもよし、気分転換に本を借りるのもよしです。書棚の間を歩くうちに思いがけない本と出会えるかもしれません。



学校図書館の入り口にあるウエルカムボード